



明治の頃のベンガラ工場が当時の姿でよみがえる

ベンガラ(弁柄)は紅殻ともよばれ、酸化鉄を主成分とする赤色の無機顔料です。江戸中期(1707年)に高梁市吹屋で生産されて以来、江戸・明治・大正にかけて陶器や漆器、印刷インキ、また防虫・防腐の機能性から家屋にも多く使用され、吹屋を繁栄に導きました。ベンガラ館は、明治の頃のベンガラ工場を当時の姿に復元したものです。当時はこの谷あいには4か所のベンガラ工場がありましたが、昭和47年(1972)の吉岡銅山の閉山にともない、昭和49年(1974)にその製造を終えました。

◆ 施設のおすすめ

ベンガラ館ではベンガラの製造ごとに建物がわかれています。原料の緑礬を700℃の火力で赤褐色に焼く「窯場室」、水を加えながら石でひき、細かく砕く「水洗礱臼室」、ベンガラの酸を抜くためにきれいな水を加えて100回ほどかきまぜる「脱酸水槽室」、うすくひきのばし乾燥させる「干棚」をみてまわることができ、鉱石が顔料になるまで当時の製造工程をわかりやすく学ぶことができます。200~300年前の明治の頃の人々が、純度の高いベンガラを製造するためにいろんな工夫をしてきたことが丁寧な製造工程から感じられます。

◆ 子どもたちへのメッセージ

みんなのおとうさんおかあさんに馴染みのあるビデオテープやカセットテープなどにも使われていたり、ベンガラは私たちの生活に身近なものでした。館内には、この付近で採鉱された残さいや当時の写真なども展示されているので、ぜひ見て触って吹屋の歴史を知っていただければと思います。



かまばしつ 窯場室



さいこう こうせき かつて採鉱された鉱石



すいせんひきうすしつ 水洗礱臼室



さいこう ようす 採鉱の様子



だっさんすいそうしつ 脱酸水槽室



ほしだな 干棚



めいじ じだい 明治時代のベンガラ工場